

# 嵐山だより

— 古典に学ぼう —

(公財)郷学研修所・  
安岡正篤記念館評議員

高橋大輔

## 【第三回】良き師に学ぶ

### ■ わが国最初の演説教本『公会演説法』

二〇二六年現在の元号は「令和」ですが、その前は「平成」で三十一年まで続きました。本誌読者の皆さんには平成生まれの方も多いことと思われまます。その前の「昭和」は六十四年ま

で続き、日本武道館は昭和三十九年に開館されました。さらにさかのぼると「大正」は十五年まで、「明治」は四十五年まで続き、その前は俗にいう江戸時代になります。

今回紹介するのは『公会演説法』という一冊で、明治十年（一八七七年）に出版されました。わが国最古の演説教本ですが、なぜ書道の月刊誌で演説の本を紹介するのか、またこの本はどのような経緯で出版されたのかをお話したいと思います。

演説というと、学校で行われるスピーチコンテストや弁論大会、もしくは全校集会などで「大勢の人の前で話す」イメージを思い浮かべる方



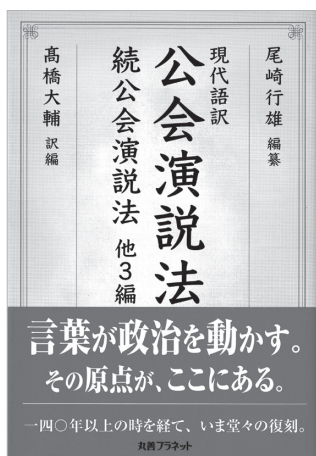
尾崎行雄  
(1858-1954)

(出典：尾崎行雄記念財団)

も多いことでしょう。けれどもそればかりではなく、「誰かに、自分の考えを伝える」ということは私たちが普通に生活する中でも無意識に行っています。では、どうやったらより良く、しっかりと伝えることができるのか。明治の初期にはそうした研究や取り組みが各地で始まるようになりました。『公会演説法』はその中でも一番はじめに出版された本であり、わが国で最も長い間（勤続六十二年）、衆議院議員を務めた政治家・尾崎行雄が海外の文献を翻訳・編纂し、日本向けに紹介したものです。

### ■ 尾崎行雄とその師・福澤諭吉

尾崎行雄は第一回の衆議院議員総選挙から二十五回連続で当選し続けたため、「憲政の神様」と称されることもあります。その原点はど



現代語訳 公会演説法・  
続公会演説法他 3 編

(尾崎行雄編纂、高橋大輔訳編)

言葉が政治を動かす。  
その原点が、ここにある。

一四〇年以上の時を経て、いま堂々の復刻。  
丸屋フナゴト

こにあつたのか。同書の現代語訳版（高橋大輔訳編、丸善ノラネット社刊、二〇二六年）には「福澤先生」と題された掌編が収録されています。福澤諭吉といえは、前の一万円札の肖像としても知られ、慶應義塾を開いた教育者でもありました。

若き日の尾崎青年は初めての著述、つまり『公会演説法』を手掛けた頃に福澤先生から次のようなアドバイスを受けます。

「オミエーさんは、いったいたれに読ませるつもりで、著述なんかするのか」

「大方の識者に見せるためです」尾崎青年がそう答えると、福澤先生は驚きの言葉を投げかけます。

「馬鹿ものめ！ 猿に見せるつもりで書け。おれなどはいつも、猿に見せるつもりで書いているが、世の中はソレで丁度いいのだ」



福澤諭吉  
(1835-1901)

(出典：国立国会図書館)

さすがに書道の場合はそうもいきませんが、そのアドバイスは令和の現代に生きる私たちにもいろいろと考えさせるものがあります。

相手を意識するあまり、立派に見せようと必要以上に取り繕ったりしてはいないか。尾崎青年が答えたのは一見すると相手のことを考えているようで、実は自分を良く見せようという「見栄」の裏返しでもありました。ならば福澤先生の教えは、どこに本質があるのか。これもまた見事な逆説で、いい加減に書けという意味ではありません。「できるだけわかりやすく、誰でも理解できるように心掛けなさい」ということをユニークな言い回しで教えたのでした。

やがて尾崎は新聞記者や東京府会議員を経て、わが国最初の衆議院議員の一人となりますが、若き日の著述が後の人生にも大きく影響したと後に振り返っています。

### ■ 良き師との出会いや学びが、人生を拓く

尾崎行雄が福澤諭吉に勧められ『公会演説法』を手掛けたのは二十歳の時ですが、その年齢で海外の文献を翻訳し、出版するということは現代から見ても並大抵の仕事ではありません。な



安岡良亮  
(1825-1876)

(出典：国立国会図書館)

ぜ、尾崎青年はそれができたのか。実は、少年時代の尾崎は、父親の上司でもあった安岡良亮という人物から四書五経の手ほどきを受けて育ちました。

安岡は明治初期の官僚で、熊本県の令（現在の知事）を務めた人物です。幼い頃から漢学に通じ、後の陽明学者・安岡正篤の曾祖父に当たる人物でもありました。安岡良亮や福澤諭吉をはじめ、多くの人物から教えを受けることで、尾崎行雄はみずからの人生を切り拓いていきました。良き師に学び、言葉を磨き、相手に届くように心を尽くす。その姿勢は、書を学ぶ上でも通じるものがあるのではないのでしょうか。今回取り上げましたいきさつは現代語訳版の「解説」でも取り上げていますので、ぜひとも書道の合間に頁をめくっていただけたらと思います。